

---

# とある海賊

やん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とある海賊

【コード】  
N8959Z

【作者名】  
やん

【あらすじ】  
一方通行が目覚めた場所は何とワンピースの世界！！アクセラさんは海賊だらけの世界で一体何をするのか！？

## プロローグ

「……………一体ここはどこだア？」

今まで気を失っていた一方通行がそう呟きながら起きる

「チツ……………こんなところで寝てた記憶はねーぞ？どうなってやがんだ？」

そう悪態を吐きながらあたりを見渡すと自分と同じように気を失って倒れている男を見つけた。

倒れている男がよく知る男だと気付くと突然男に蹴りを入れた

「とっと起きやがれクソメルヘンが！！！」

「ぐあー！！！」

蹴られたクソメルヘンは30mは離れているであろう木にぶつかり止まった。普通の人間ではありえない脚力である。

少しの間、痛みで悶絶していたクソメルヘンだがすっと立ち上がりゆっくりと一方通行に近づいてくる。

「何処のどいつか知らねーが、この学園都市第2位の垣根 帝督様にケンカを売ったんだ。覚悟は出来てんだろうなカスがあー！！！」  
怒声とともに森が揺れるのが分かる。常人ならば間違いない逃げ出すような威圧感を出しながら垣根が迫ってくる。

しかし一方通行は常人ではなく逃げ出すようなことはしない。それどころか恐怖の顔色すら見せず寧ろ楽しんでいるように見える。

と、その時一方通行に向かって何かが飛んでくるのが見えた。  
「そいつはただの石じゃねえ。俺の能力で炎を纏わせた。焼け死にな」

垣根が言った通り炎を纏った石が一方通行に迫る、が、一方通行は避けようとしなない。もう石は目の前に来ていた。

垣根は直撃だと確信した。

その瞬間顔の横に弾丸を超えたスピードで何かが横ぎった。

「っ!？」

垣根は驚いていた。学園都市第二位の自分の攻撃を喰らって立って居られる人物などそうはいない。

垣根はいつでも攻撃ができるようにし、相手が出てくるのを待った。

「オイオイオイ、クソメルヘンくんよオ。いきなり攻撃してくるなんてどオいうことだア? 愉快的オブジェにでもされたいンですかア？」

挑発的なその声を聞いた瞬間垣根は誰を相手にしているか悟った。

「なんだ、てめえだったのかよモヤシくん、細すぎて見えなかったぜ」

にんまりとした笑顔で垣根が笑う。

「イイ度胸じゃねエか垣根くん、ホントに死にたいらしいな？」

「ウソウソごめんってww」

一方通行を怒らせても何の得にもならないと気付いた垣根は素早く怒りの消火活動を行う。

「まあいい、それよりここが何処だかわかるか？」

怒りを収めた一方通行が垣根に問う。

「ん? 何処って、学園都市じゃ……って、ここ何処だ!？」

どうやら聞くだけ無駄だったようである。

「お前今まで気付かなかったのかア? バカにも程があンだろ」

「いや、仕方ねえだろ!?! いきなりたたき起こされたんだぜ!?!」

「叩いてない、蹴った」

「どうでもいいわそんな事!?!」

今度は垣根がヒートアップしてきた。

「んなことはどうでもいい、お前、ここに来る見覚えは？」  
心底どうでもいい感じで垣根をスルーした一方通行は垣根に質問した。

「俺にとってはどうでもよくないんだが……いや、そんなの全然ねえし、ここがどこかも分からねえ」

少し不満そうな垣根だが話が進まないため黙っておく。

「そオカ、俺もそんな感じだ。またアレイスターか何かの仕業だろ。」

「アレイスターとは学園理事長で一番偉い人である。」

「多分な、こんなことできるのはアイツぐらいだろ」

垣根も一方通行の考えに同意する。

「ここについても何にもわかんねえ、とりあえず情報収集しに行くか」  
垣根が提案する。

「ダリイがそれが得策だな」

一方通行も賛成し、二人は歩きまわることにした。

## 第1話（前書き）

意外と書くの疲れますね。けどいい感じに達成感が。まあとりあえず見てくださいww

## 第1話

「おい、町があんぞ」

垣根が発見し、一方通行に知らせる。

「あそこで話でも聞くか」

そっくりい町に入る二人

「おや、アナタ達も海賊ですか？ようこそいらっしやいました！こはもてなしの町ウイスキーピークです！」

町の一人が二人を見つけ話しかけてくる。

「あア？海賊？」

妙な単語が気になり一方通行は聞き直す。

「あれ？違いました？じゃあ商人の方ですね！大丈夫！どんなかたでもおもてなししますよ！」

町人は職業を勘違いしたと思ったらしく、今度は二人を商人だと言い出した。

「何言つてんだ？俺ら学園都市の……あアもういいやめんどくせ」  
誤解を解こうとしたがめんどくさくなったのか話を切り上げる一方通行

「では宿にご案内いたします。こちらにどうぞ」

何だかめんどくなくなった二人は、黙って町人について行った。

.....

「着きました。ここが宿です。先に海賊の方がいらっしやいますがごゆっくりどうぞ」

そっくりい町人は去って行った。

中に入るとさつき町人が言っただであるう海賊らしき連中が騒いでいた。

「うらあー！もっと肉持ってこーい！ー！」

「酒追加だ」

「そこで俺は言っちゃったのさ、俺の仲間に手を出すなってね」

「君凄く可愛いね！ここは天国だああ！！」

あるものは肉を食い続け、あるものは酒飲みの勝負をし、あるものは女性を口説いてる。見るからに愉快そうな連中だった。

「……なんだこのバカっぽい連中は？」

垣根があきれた風に言う。

「海賊つて言ってたな。この時代にんな奴らいるわけねエ、つまりだ」

一方通行が推測を伝える

「ここは俺たちのいた時代じゃないってことが」

垣根も答えにたどり着く

「そオいうこつた。まアアイツならこんぐれーできそうだがな」

一方通行は自分自身で納得する。

「何でこんなことしたかって言われると興味があつたぐらいしか理由がな」

垣根が言う。そう、アレイスターとはたかが興味本位でこんなことができる権力者なのだ。

「あなたがた新しく来られた商人のかたですね？ようこそいらじや・  
・ゴホン、マ〜マ〜マ〜マー いらっしやいました。私はイ  
ガラッポイと申します。どうぞおくるぎください」  
突然変な髪型をした男が話しかけてきた。

「いや、別に俺たちは商売人じゃない。気付いたらここに居たんだ」  
垣根が頭を見ながら誤解を解く

「なんと！？旅の途中で記憶を亡くされたのですね？なんとという不幸だ……せめてこの町で最高の思い出を作ってください！」

誤解は全く解けはせず、イガラッポイは二人を記憶喪失だと思ったらしい

「いや、記憶喪失でもない……ってもういいや、疲れた」

何とか誤解を解こうとしたがまたもやどうでもよくなり記憶喪失に



しておいた。

「んなことより今は何時代なんだア？」

一方通行は疑問をぶつけた

「今は海賊王ゴールド・ロジャーが死にロジャーの宝を巡り、様々な海賊が居る、大海賊時代です」

イガラツポイの答えに二人は顔を合わせた。

「ロジャーなんて海賊聞いたことねえぞ？」

「もしかしたらここは俗に言うパラレルワールドって奴かもしんねーなア」

二人が考えているとイガラツポイが話しかけてきた。

「お二人は記憶を無くされたのでしょうか？仕方ないことです。さあ、辛気くさい顔しても何も変わりませんよ！？今は宴を楽しみましょうー！」

そういいイガラツポイは去っていった。

「考えても今は埒が明かねエンだ、取り敢えずメシ食つかア」

一方通行はそう言いコーヒーを探しに行った。垣根も

「まあ、腹減ったし考えんのは後にするか」

こうして二人は飯を食べ、床についたのである。

.....

「海賊四名に記憶喪失の一般人二名、今回は楽な仕事ね」

巨体の女がそう言う

「油断するなミス・マンデー、あの海賊船長は三千万ベリーなんだぞ？」

イガラツポイが鎮める

「さ、三千万ベリー！？」

小柄の女と金属バットを持った男が声を揃えて驚く

「そうだ、だから気を引き締めていけ、船長以外はカスだ、特にあ

の二人は何時でも殺れる」

「「「おおっ！」「」」

イガラツポイが激を飛ばした。今まさに狩りが始まるうとしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959z/>

---

とある海賊

2011年12月28日03時47分発行